

地域に根差し、価値向上

関橋氏 暮らしに近い情報大切

「デーリー東北はどうあるべきか。玉樹 地方紙なのだから、もっと自由でいい。店頭などに並ぶ新聞は、どれも同じで見分けがつかない。見た瞬間にデーリー東北だと分かるくらいがいい。堅苦しい話ではなく、暮らしに密着した楽しいコンテンツを増やしていけばどうか。」

金入 この地域にこだわりのながら、この地域にとどまらない、これからの生き方の指針になる情報発信に期待したい。言うなれば、「華麗なるローカルスタンダードの確立」だ。県境などにとらわれない、われわれが暮らし地域に根付いた情報の価値はさらに高まってくる。エコミック・マンデーもそう。テーマは経済だが、自分の暮らしに視線を置いている。この地域で暮らしの指標となるよ

うな役割を果たし、もっと分析、提言してほしい。

関橋 同感だ。日々の暮らしに近い情報がそが大事。一番求められている情報が明快になれば、そういう紙面構成になっていく。新聞紙という形は変化するかもしれないが、ローカル紙が個性を持ってやり始めたら面白い。

荒瀬 新聞は記者の主観を入れずに客観報道主義でやってきたが、若い人たちは常識的過ぎる記事に満足できなくなってきた。客観をどこまで捨て、主観をどう発信できるか、瀬戸際に来ている。ニュースを発信する際の立ち位置で取材、報道の仕方は変わる。立ち位置をはっきりさせれば、おのずと他社との差別化が図られていくと思う。多様性を持った取材、報道活動が必要だろう。

玉樹氏 読者の共感呼ぶ紙面に

「今後、期待することは。石橋 もっと面白いことをやってみては。かなり批判もあると思うが、東京新聞はエイプリルフールに、うそのニュースを載せている。エンターテインメントを提供し、もっと「攻めた」新聞になってほしい。」

玉樹 実は新聞を最初から最後まで、全てのページを読んだことは一度もない。まだまだ字が多く難しい。そういう意味では、エコミックマンデーのように、地方紙は読者にもっと優しくてもいいという気もする。そうすれば客観や主観のさらけ、読者の共感を呼ぶレベルまで行ける。地域のみならず同じことを考えている新聞

荒瀬 米国の地方紙が廃刊になった地域で、知らない間に議員報酬が大統領を上回るほど高額になっていったのに誰も気付かないということがあった。報道機関が消えると、おかしいことが起きるといった例だ。

皆さまから心強い言葉を頂いた。われわれはそうした権力の監視役としての自覚を持ち続けながら、地域の皆さんももっと近づきたい。顔が見える、息遣いが聞ける紙面を作れば、まだまだやっていけると信じている。株式会社なのでお金も稼がなければならぬのだが、一番は地域の役に立つことをする会社として生きていきたい。